第2回企画展

# 縄文人の暮らしと風景

# 黒橋貝塚発掘展

1992

熊本県立装飾古墳館

第2回企画展

# 縄文人の暮らしと風景

## ――黒橋貝塚発掘展――

主催／熊本県立装飾古墳館

期間／平成４年10月１日～11月30日

協力／熊本県教育庁文化課・熊本市立熊本博物館・城南町歴史民俗資料館

もくじ


企画展開催にあたって …… 1

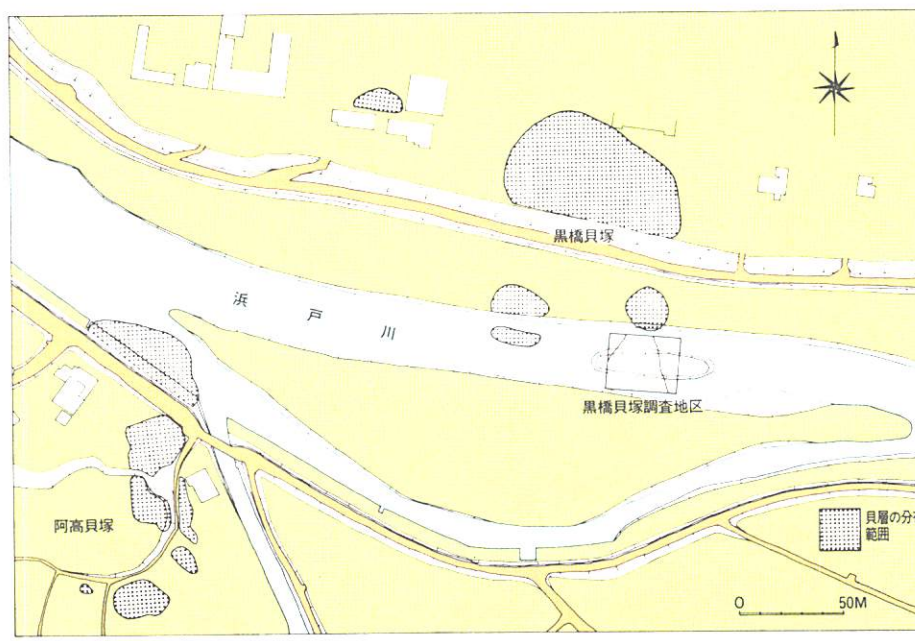
貝塚とは何か …… 2

黒橋貝塚発見 …… 5

貝塚を掘る …… 7

出土遺物は語る …… 11

失われゆく貴重な遺跡―貝塚― …… 20


黒橋貝塚周辺図

表紙写真：黒橋貝塚出土の縄文土器

# 企画展開催にあたって

熊本県立装飾古墳館は、平成４年４月15日に開館して以来、大変多くの皆様に御来館いただいております。その際、開館記念の企画展として「よみがえる古代～装飾古墳の世界～」を開催しましたところ、大変好評のうちに終了することができました。

そこで今回は、古墳時代からさらにさかのぼること数千年、私達日本人の直接の遠き祖先である縄文人の暮らしと縄文人が生み出した様々な文化について、黒橋貝塚の発掘成果をとおして紹介することにしました。

黒橋貝塚は下益城郡城南町に所在する縄文時代中期～後期の貝塚です。昭和47年同町を貫流する浜戸川の氾濫と堤防決壊により発見された遺跡で、昭和50年には遺跡の一部が「阿高・黒橋貝塚」として国の史跡に指定されています。

今回紹介する資料は、熊本県文化課が平成元年からおよそ３年間にわたって発掘調査を実施した際出土したもので、初めて公開されるものです。

数千年の時を過ぎた今、私達の前にその姿を現したさまざまな遺物は、縄文人がそのきびしい自然環境のなかで生き抜くための知恵や工夫の証であり、その伝統はいまも私たちの生活習慣や生き方に脈々といきています。

こうした縄文時代の文化について、触れることができる今回の企画は、日本や日本文化を見つめ直すために意義深いことと考えます。また、ご覧いただいた皆様のご意見を参考にして、今後の研究充実に努めたいと考えております。

この企画展を開催するにあたりまして、ご協力・ご指導いただきました方々に、心から厚く御礼申しあげます。

平成４年10月１日

熊本県立装飾古墳館長　原　口　長　之

# 貝塚とは何か

## 貝塚はどうしてつくられたか

貝塚とは人々が農業を知る以前、まだ狩猟や採集によって生活していた時代に、食料として捕った貝類の殻を捨て続けた結果出来たものです。

日本で最初に貝塚が現れるのは、いまからおよそ１万年前の縄文時代早期のころです。世界史的にみてもほぼ同じころ現れます。その後、弥生時代、古墳時代、歴史時代を通じて見られますが、大部分の貝塚は縄文時代のものといっていいでしょう。

かれらは海辺や川辺に村をつくって、漁労生活を営んでいました。不用になった貝殻をはじめとした生ごみや生活資材は、むらのまわりに捨て続けられ、貝殻の分布状態が村そのものの規模や形をあらわしている場合があります。この場合、貝殻に囲まれた内側には、当然竪穴住居跡が発見されることになります。いずれにせよ、貝塚は人々の生活場所に極めて近くに残されたものと考えていいわけです。

貝塚からは、数十種の貝類が発見されることが多いのですが、好んで捕(と)られたのは、その中の限られた種類です。カキ・ハマグリ・ハイガイ・アサリ・シジミなどがそれで、現代の日本人の好みと通じているようです。しかしハイガイのように、縄文時代に盛んに捕られたにもかかわらず、現在ではほぼ絶滅した種類もあります。

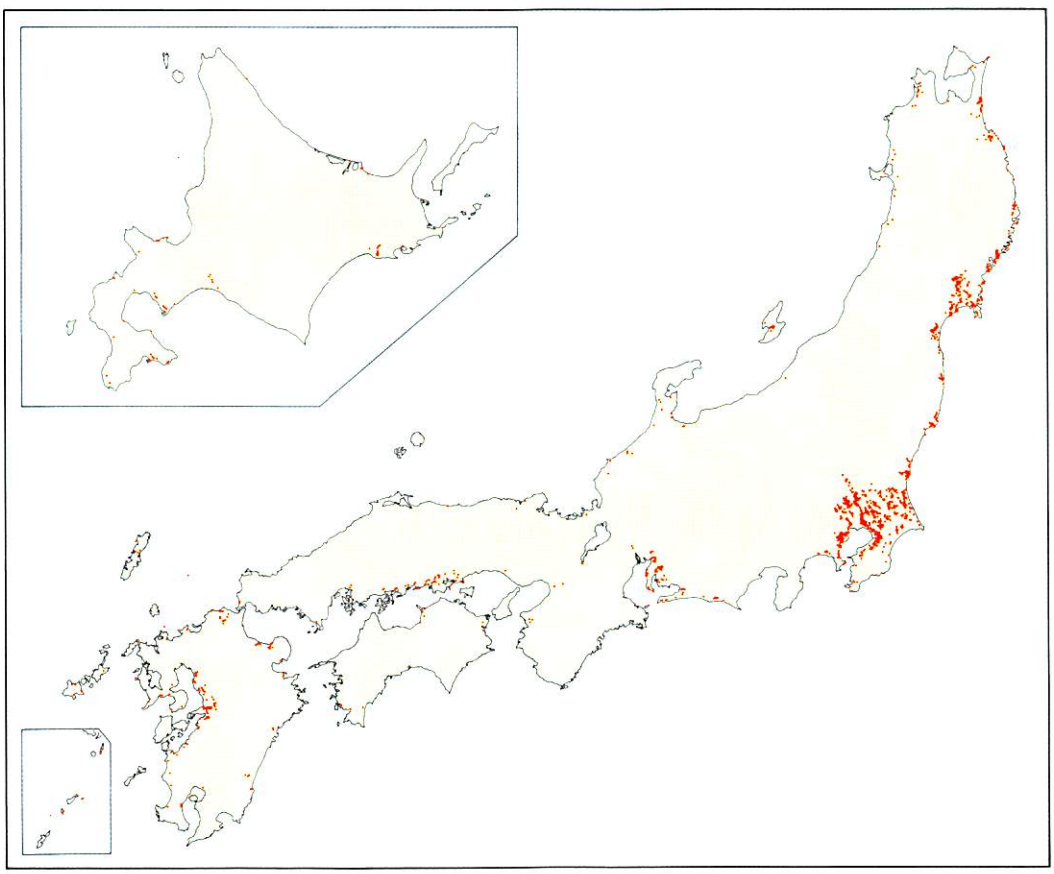
貝殻とともに、獣や鳥や魚の骨なども多く出土します。普通の土壌では酸性が強く、分解されて残りにくいのですが、貝殻を多く含む土壌中ではアルカリ性に保たれるため、数千年もの間保存されてきた訳です。石灰岩の中に多くの化石が残されているのと、同じ理由によるものです。

こうしてみると貝塚は縄文人の「生ごみの捨て場」そのもので、なにやら生臭くて汚い印象を与えるようですが、実はこの「ごみ捨て場」こそ縄文時代を知るための計り知れない情報が詰まっているのです。当時の人々の生活や文化、さらに社会の構造やしくみを知るための貴重な遺跡であり、縄文人が残したタイムカプセルでもあるのです。

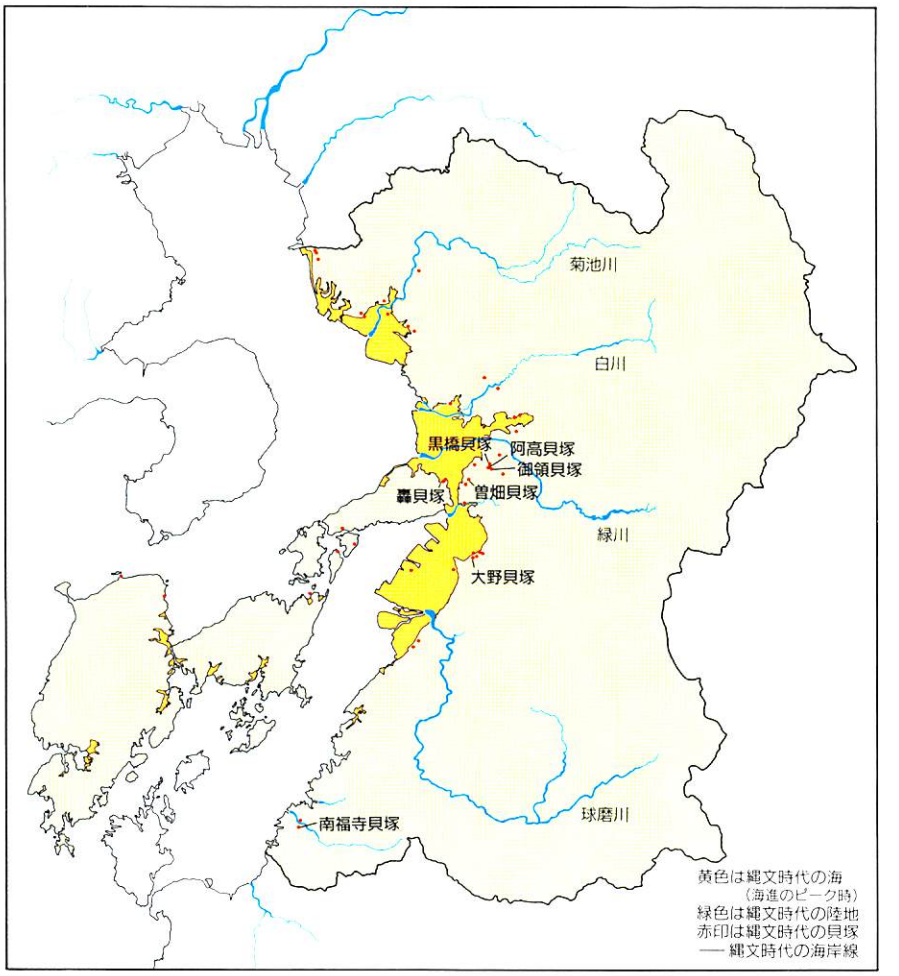
## 日本の貝塚

貝塚は遠浅の波静かな内海が発達する地域であれば、世界中どこでもつくられました。特に周囲を海で囲まれた日本列島にも多くの貝塚が、残されています。その数はおよそ3000ケ所ともいわれています。主な貝塚の分布を示したのが下の図です。

貝塚は日本列島の北から南まで、あらゆるところに残されました。しかし分布の密度を見ると、太平洋側に多く日本海側に少ないことが分かります。その原因には諸説がありますが、第一には地形的な条件と考えられます。とくに日本海側では太平洋側に比べて潮の干満の差が小さく、そのため干潟が狭く、貝類の生息に適する場所が少なかったからではないかと言われています。



日本における貝塚の分布




熊本県下における主要貝塚の分布図

## 熊本の貝塚

熊本県にある貝塚は、縄文時代のものだけでも、およそ130ケ所といわれています。波静かな内海に囲まれた、有明海沿岸地域は潮の干満の差が大きく、広大な干潟を発達させました。東北地方の仙台湾や東京湾周辺とならんで、貝塚の密集地帯として知られています。また、この地域の貝塚についての研究も古く、明治時代にさかのぼることができます。明治10年、大森貝塚（東京都品川区）を発掘調査して、近代日本の考古学の第一歩を踏み出したアメリカ人の動物学者エドワード・モースは、熊本を訪れた際、八代郡竜北町の大野貝塚などを調査し、その様子を著書『日本その日その日』に記しています。熊本の貝塚研究は、日本のそれとほぼ同時に始まったといえます。

# 黒橋貝塚発見

## 貝塚現わる

昭和47年７月６日、熊本県下を襲った集中豪雨は各地に大きな被害をもたらしました。特に、天草郡竜ケ岳町や姫戸町では土砂崩れで家屋が倒壊し、尊い多くの人命が失われました。下益城郡城南町では、緑川の支流である浜戸川の堤防が決壊して、町の中心部の大半が水没し、床上浸水した家屋は実に750戸以上という大災害となりました。濁流が引き始めた数日後、決壊した堤防の周辺には大量の土砂とともに貝殻が一面に散乱していたのです。これが貝塚発見のあらましです。「くろばし」という地名は貝塚発見地点のやや下流に架けられていたという橋の名に由来するらしく、貝塚の第一発見者である徳本明氏（当時城南町社会教育課長）により名付けられたものです。しかし、どの地図にも「黒橋」の名を見い出すことは出来ません。

増水した浜戸川、発掘調査地区は水中に没しています。平成元年３月、発掘調査開始直前の黒橋貝塚。

## その後の黒橋貝塚

貝塚発見地点から南西に0.2㌔には国指定史跡「阿高貝塚」、さらに南東約0.5㌔には同じく「御領貝塚」などがあり、この一帯は貝塚の密集地帯として知られていましたから、堤防の決壊という偶然の出来事とはいえ、新たな貝塚が発見されたとしても、決して不思議なことではなかったわけです。

その後、翌昭和48年３月に、熊本県の依頼を受けた熊本大学による範囲確認の調査が行なわれ、さらに昭和49年浜戸川の河川改修事業に伴って熊本県文化課による発掘調査が実施されました。この時の調査成果は昭和51年３月熊本県文化財調査報告第20集「黒橋」として刊行されています。こうして昭和56年には遺跡の一部が国指定史跡「阿高・黒橋貝塚」として保存されることになったのです。

ところがその後の浜戸川は堤防決壊にまでは到らなかったものの、梅雨期には幾度となく危険な状態をくり返していました。こうして平成元年３月、河川改修のため、河川敷内に残っていた貝塚の一部について発掘調査をすることになったのです。調査は平成３年５月まで、およそ３年間を費やしました。

発掘調査によって出土した遺物は膨大な量に上り、調査の成果をまとめるには、まだ相当の時間を費やすことが必要です。現在もその整理作業が続けられています。

増水した浜戸川と発掘調査地区

# 貝塚を掘る

## 発掘の準備

黒橋貝塚のある場所は、浜戸川の中の大変低い湿気の多い所です。しかも少しまとまった雨が降ると、水中に埋もれてしまいますから、普通の台地上にある遺跡のように、すぐにスコップで掘り始めるわけにはいきません。

そこで、雨が降っても安心して作業が出来るように、発掘する部分に矢板という鋼鉄製の長い板を打ち込んで囲んでしまいます。さらにその外側に土を盛り上げて堤防をつくります。これで多少の雨でも大丈夫です。それでも少しずつ川の水や地下水がしみだしてきますから、常に水中ポンプを使って水を囲いの外に出さなければなりません。

## さあ、発掘開始

こうしてやっと発掘調査の開始です。貝塚の上には浜戸川によって運ばれてきた土砂が厚く堆積していました。およそ１ｍ程です。まずこの土砂を取り除くことから始めました。小さな貝殻や縄文土器のかけらがでるところまで掘り下げたところで、発掘地区全体を４ｍ四方の碁盤の目になるように区

各グリットの発掘調査風景。掘り上げた土は、すべて層ごとに分類して、ひとまず土のう袋に納めます。発掘調査後に水洗して獣骨や魚骨などの動物遺体や肉眼では発見しにくい細かな遺物を選びだします。

分けをして、この4ｍ四方を一つの単位として発掘を始めます。こうした発掘方法を、考古学ではグリット法と呼んでいます。それは発掘を進めて行く場合、出土遺物などが平面的にどのような状態で埋もれているのかとか、その遺物がどの層に位置しているかを確かめるために有効な方法です。貝塚に限らず他の遺跡の発掘でも良く用いられる調査方法です。

## 出土しはじめた縄文人の生活

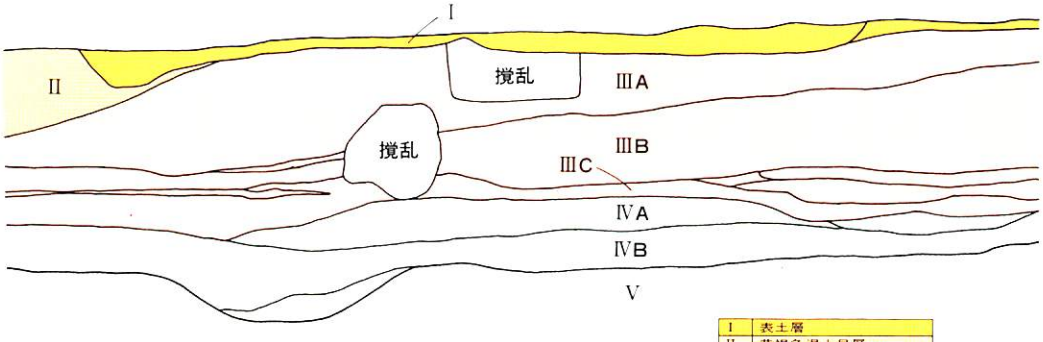
4ｍ四方のグリットを掘り下げる作業が来る日も来る日も続きました。あるグリットではいくら掘っても貝殻だけしか出てこない場合もありました。ところがあるグリットでは貝殻に混じって、縄文土器の破片や石器や獣の骨などが出てきました。こうした遺物は出土位置や層位などを図面に記録し、出土状態の写真撮影をします。これらの遺物は数千年前に縄文人がここに運んで来て捨てて以来、はじめて人の目にふれたもので、しかも縄文人の生活そのものを現代の人々に語りかけるものです。ですから貝塚の発掘は縄文人との対話のはじまりともいえるのです。

発掘を終えた一つのグリット。最下層には阿高式土器とともにシカやイノシシなどの獣骨が出土しました。さらに、その下からは直径１～２ｍほどの穴が数多く出てきました。これらはドングリを貯蔵した穴で、調査地区全体で76基を検出しました。こうした風景は、貝殻などが捨てられはじまる遺跡の直前の様子をしめしたものとして注目されます。

土壙の中に捨てられた縄文土器

縄文土器の出土状態

土層転写の作業（保存状態の良い貝層は、直接接着剤を塗って、さらに補強のためガーゼを張ってはぎ取ります。はぎ取った資料は貝層の断面の永久保存方法として有効です。）




| | |
|---|---|
| I | 表土層 |
| II | 黄褐色混土貝層 |
| IIIA | 暗褐色混土貝層 |
| IIIB | 暗青灰色混土貝層 |
| IIIC | 破砕貝層 |
| IVA | 青灰色粘質混土貝層 |
| IVB | 青灰色粘土層 |
| V | 青灰色粘土層 |

土層転写した部分の貝層断面図（F-7・G-7区）

# 遺構と遺物

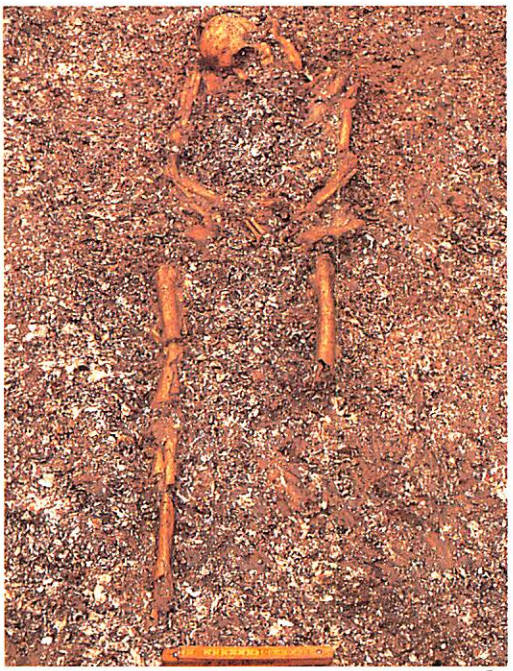
①

④

②

⑤

③



⑥

①最下層から出土したドングリの貯蔵穴。(C－9区)
②ドングリ貯蔵穴から出土したイノシシの頭骨。(G－11区)
③まとまって出土したイノシシとニホンジカの下顎骨。(C－7区)
ていねいに埋葬されたように並べられている。
④ニホンジカの下顎骨。(F－6区)
⑤イヌの頭骨。小型犬でしかも幼犬らしい。(E－11区)
⑥貝層中に埋葬された人骨。縄文後期。(G－11区)

# 出土遺物は語る

## 縄文土器

黒橋貝塚から出土する縄文土器は、並木式土器、阿高式土器、南福寺式土器・出水式土器などで、九州の有明海沿岸地方を代表する縄文時代中期から後期の土器です。この時代の土器は1万年程続いた縄文時代の中でも、最も文様が華やかで、変化に富んでいて、中には芸術的ともいえるほどの作品さえみられます。

貝塚に限らず、縄文時代の遺跡を発掘すると、もっとも多く出土する遺物は縄文土器です。縄文土器の名は、明治から大正時代にかけて、縄文土器の研究が始まったころ、研究の舞台が関東地方を中心とした東日本にあり、この地域の土器に縄目のある土器が特徴的であったため、「縄文式土器」や「縄文土器」の名で呼ばれたことによります。しかし縄文土器は縄目が残されたものばかりではありません。現に西日本ではヘラや棒のような道具を使って文様を描いた土器の方が多く出土します。

縄文人は土器に水をくみ、食料を貯蔵し、食物の調理にも使いました。縄文土器は素焼きですから、水もれしやすく、また厚手の土器ですから、煮沸にも効率が悪かったと思われます。そこで様々な改良を行いました。たとえば水もれを防ぐために、粘土の中に滑石を混ぜたりしてきめ細かい土器をつくることにも力を注いできました。縄文土器の永い間の様々な変化は、実はこうした土器の改良の歴史ともいえるのです。

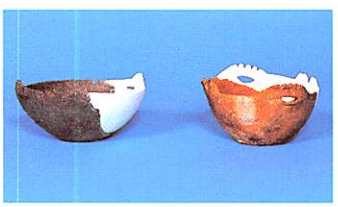
効率の良い土器の改良とともに、見逃せないのは土器に施された様々な文様や器の形そのものの変化です。縄文時代の初めのころの土器は深い鉢形だけで、文様も単純なものが多いのですが、これは装飾としての文様というよりも、みぞを刻んだ棒を土器に押しつけながら転がして、粘土内の空気を押し出したり、形を整えたりすることが主であったといえます。また器の形も前期から中期になると、深い鉢に加えて浅い鉢や壷などが現れます。中期になると、器形の変化にまして装飾文様が著しく発達しました。後期から晩期になると、注口の付いた土器や高坏などがみられるようになります。また土器の表面を磨いたものも現れます。

深鉢形土器（阿高式土器）

深鉢形土器（阿高式土器）

浅鉢形土器（黒橋式土器）

黒橋貝塚出土の縄文土器


鉢形土器（阿高式土器）

鉢形土器（阿高・南福寺式土器）

鉢形土器（南福寺式土器）

鉢形土器（阿高式土器）

無文の深鉢形土器（阿高式土器）

全面施文の深鉢形土器
（阿高式土器）

こうした縄文土器の変化を、整理したものが縄文土器の編年です。遺跡や遺物の年代を決定する重要なてがかりとなるものです。それは縄文土器が、どの遺跡からも、もっとも多く・普遍的に出土するからです。

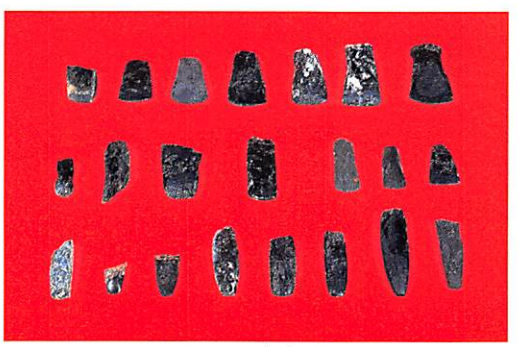
# 道具のいろいろ

縄文時代には土器の他に、さまざまな道具がつくられました。木や草を材料にしたものから、石や動物の骨や角や牙など、身近にあるさまざまなものが材料となりました。しかし、貝塚のように骨や角や牙が残る特殊な例を除けば、土器や石器から縄文人の暮らしを推測するしかありません。ここでは利用された材質ごとに紹介します。

## 石製品

磨製石斧

磨製石斧（蛇玟岩製）



石のみ（蛇玟岩製）

〔工具〕

**磨製石斧**（ませいせきふ）

石斧には石を割って加工しただけの打製石斧と全体を砥石などで研いで形を整えた磨製石斧とがあります。黒橋貝塚から出土した石斧は大部分磨製のものです。いずれも木材の伐採や荒加工に使われました。

**石のみ**

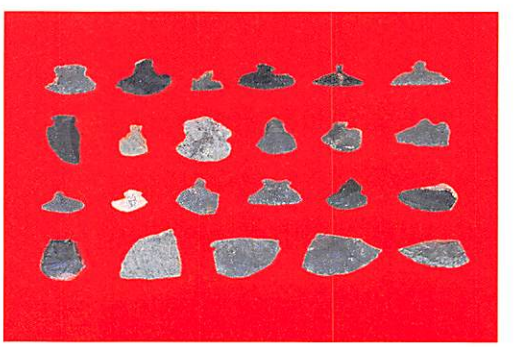
石斧に比べて小型で、いずれも砥石で形を整え鋭い刃をつけています。木材の細かな部分の加工に使われました。

**石匙**（いしさじ）**・スクレイパー**

射止めたイノシシやシカなどの皮を剝ぐための道具です。

**石錐**（いしきり）

石片を錐状に加工したもので、土器や骨などに穴をあけるための道具です。



石匙・スクレイパー

石鏃

## 〔漁労具〕

**石錘**（せきすい）

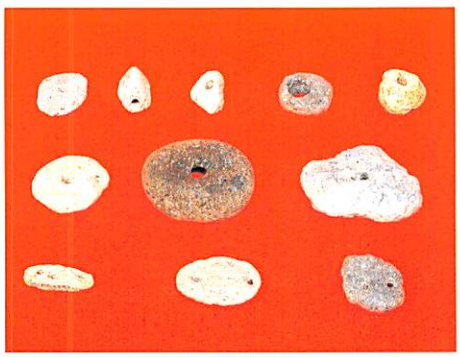
魚を捕るための網に取りつけた錘で、大きさもさまざまなものがあり、網の長さや捕獲場所によって使い分けられました。

**浮子**（うき）

石錘とセットで網に取りつけて使用され、すべて軽石製です。石錘に比べて、出土量が極端に少ないのは、木などが多く利用されたためだと考えられます。

**双頭形石器・単頭形石器**

やや大型の石器で突起が一つのものと二つのものとがあります。アワビ起こしの道具ではないかという説がありますが、定説はありません。ただ、貝塚などの海辺の遺跡に集中的に出土することから、漁労に関係する道具であったと思われます。



軽石製浮子

## 〔狩猟具〕

**石鏃**（せきぞく）

弓の矢柄に付けて、獣を射止める道具です。

石錘

石錘

双頭形石器・単頭形石器

石皿・磨石

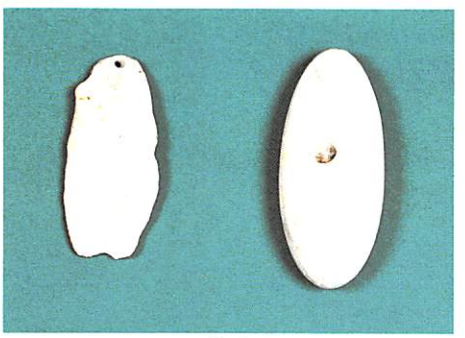
〔調理具〕

石皿（いしざら）・
磨石（すりいし）

ドングリをすりつぶして粉にする道具で、石皿は地面に置き磨石は手にもって使用しました。

叩き石（たたきいし）

磨石の周辺部を叩き石として使う場合と、自然石をハンマーとして使った場合があります。



大珠

〔装身具〕

大珠（たいしゅ）

首飾りの一種で、ひすい製のものが多いのですが、出土品は石灰岩製です。

垂飾具（すいしょくぐ）

ペンダントの一種で、やはり石灰岩製です。

〔軽石製品〕

浮子と同じ軽石を材料とした各種の遺物が出土しています。中には石皿のように中央部が凹んだものもありますが、用途は不明です。

軽石製品

## 土製品

〔工具〕

紡錘車（ぼうすいしゃ）

土器の破片を円板状に加工し、中央に小さな穴をあけたものです。この穴に棒を差し込んで、糸を紡いだものです。

紡錘車

土器片錘

土版・円盤形土製品

〔漁労具〕

土器片錘

土器の破片の両端を打ち欠いて、網のおもりとして再加工したものです。石錘と同じ用途です。

〔呪術具〕

土版

手のひらに収まる程度のもので、片面に文様が描かれ、呪術などに使われたと考えられています。

円盤形土製品

土器片を円板状に加工したもので、使用目的ははっきり分かっていません。

## 骨角器

〔工具〕

鹿角製刺突具

鹿の角の先端を加工した道具で、石鏃や石匙などの細かな細工を必要とする場合に使われました。中には装飾を施したものもあります。

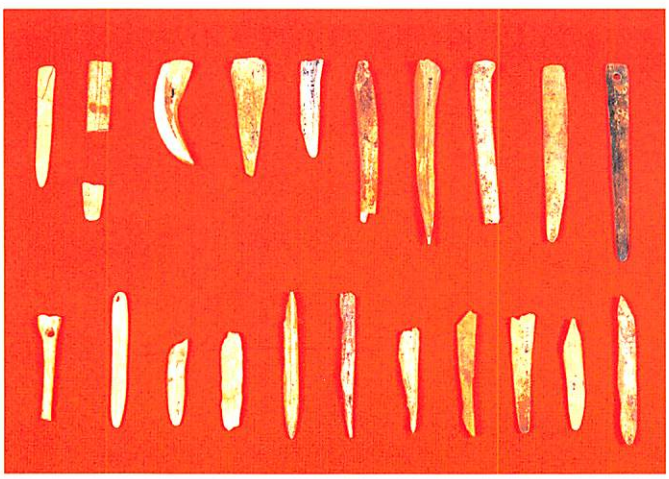
鹿角製刺突具

ヘラ状工具

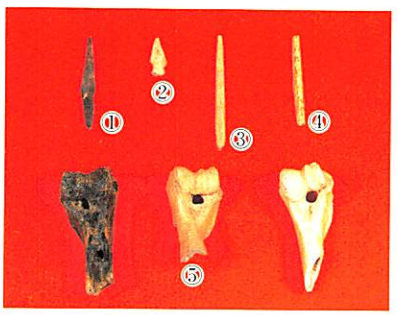
獣の骨を加工してつくられた工具で、土器に文様を描いたり、貝の身を取り出した色々な用途が考えられます。

骨針

骨を加工した針で、網を作る際や、補修に使われたものです。



ヘラ状工具・骨針



やす（①③④）　銛（②）

〔漁労具〕

やす

骨を加工したもので、銛と同じように魚を突き刺して捕獲する道具です。

銛

やすと同じ用途ですが、かえりがあります。

有孔骨角器

大形の骨の一部に穴をあけたものです。用途は不明です。

〔装身具〕

笄（こうがい）

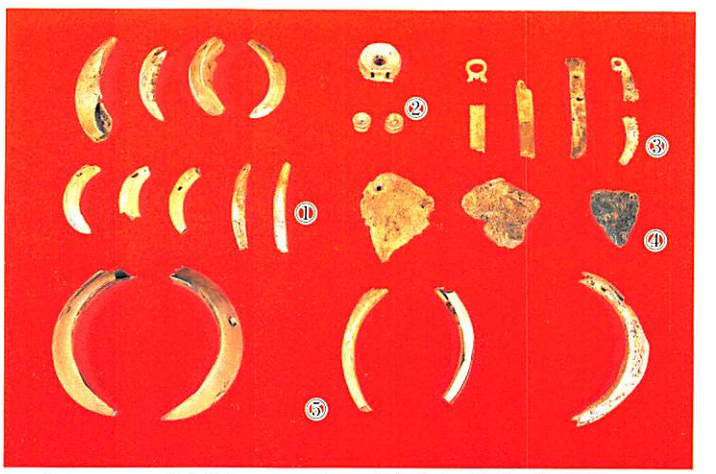
髪飾りの一種で、ヘアーピンとも言います。

猪牙製玉

猪の牙に穴をあけた首飾りの一種です。縄文時代の装身具としては一般的にみられ、勾玉と形態が良く似ています。

猪牙製腕輪

猪の牙に数箇所の穴をあけた腕輪で、猪の雄の大きな牙を使っています。



①猪牙製玉　②魚骨製耳環　③笄　④魚骨製垂飾具　⑤猪牙製腕輪

猪歯製玉

猪の歯の中でも下顎にある前歯を使っています。

魚骨製垂飾具（ペンダント）

スズキの鰓蓋にある骨の一端に小さな穴をあけたペンダントの一種です。

魚骨製耳環

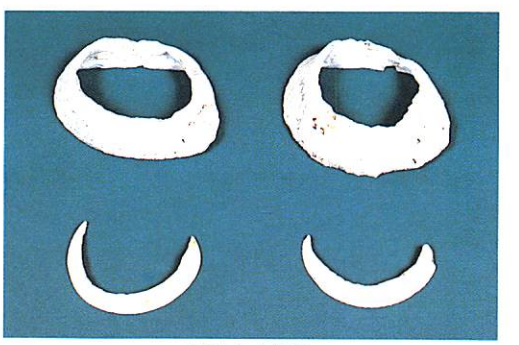
魚の脊椎骨を加工した耳飾りで、サメや大型の魚のものが使われました。

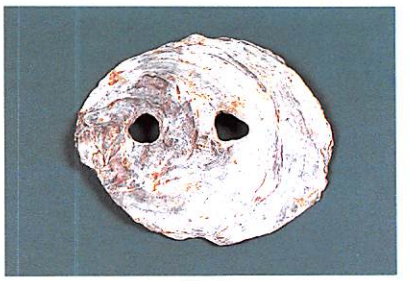
## 貝製品

〔装身具〕

貝輪

二枚貝を加工した腕飾りで、出土品はサルボウ製です。この外にハマグリやアカガイなど大型の二枚貝を利用することが多いようです。出土例はサルボウ製です。


貝輪と未製品



貝面

〔呪術具〕

貝面

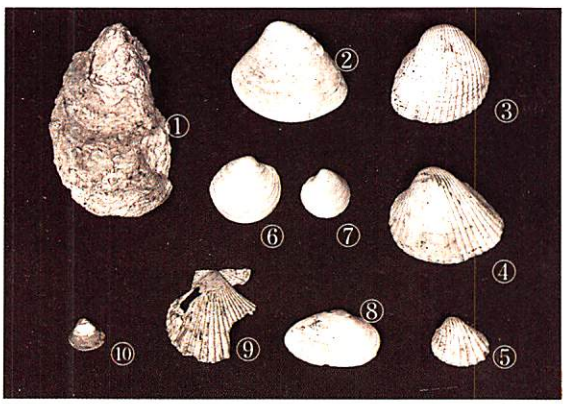
大型のイタボガキに目や口などを現すような穴をあけたもので、呪術などに使われたお面と考えられています。阿高貝塚や、韓国の東三洞貝塚にも同様の出土例があります。

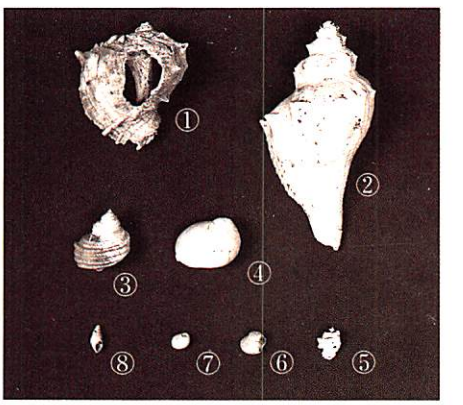
# 自然遺物

## 貝　類

貝類には二枚貝と巻貝があります。黒橋貝塚出土の貝類は全体の80％以上マガキで占められています。その他ハマグリ・ハイガイが各５％、ヤマトシジミは３％、その他の二枚貝や巻貝は極く微量に含まれているだけです。

また貝層の上部と下部、さらにはその中間では、貝の種類や組成に変化がみられます。全体的な傾向としては、下層ではカキやハマグリ・ハイガイが占める割合が大きく、上層にいくに従って、ヤマトシジミやカワニナの割合が増える傾向にあります。




〔二枚貝〕

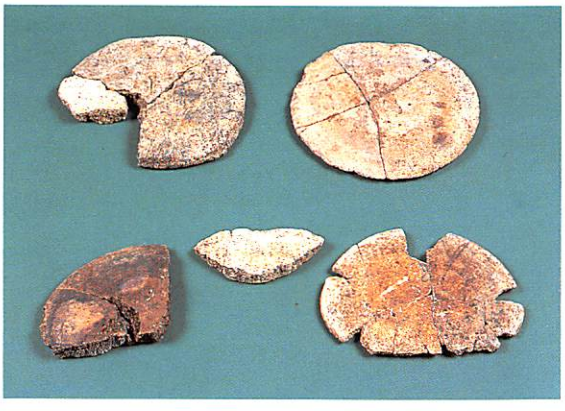
①マガキ　⑤ハイガイ　⑨イタヤガイ
②ハマグリ　⑥カガミガイ　⑩ヤマトシジミ
③アカガイ　⑦オキシジミ
④サルボウ　⑧ムラサキガイ

〔巻貝〕

①アカニシ　⑤レイシ
②テングニシ　⑥スガイ
③サザエ　⑦ヒメミミガイ
④ツメタガイ　⑧カワニナ

## 鯨　骨

鯨骨には脊椎骨および脊椎盤とが出土しています。鯨は食料として捕獲したことは十分に考えられますが、出土した鯨骨ほとんどは土器を作る際の作業台として使われたものです。現に出土した土器の底部に脊椎骨特有のスタンプが残ったものが多く出土しています。縄文中期の阿高式土器の特徴の一つともなっています。



## 糞石(ふんせき)

糞石とは、排泄物が貝層中で化石化したものです。福井県の鳥浜貝塚から多く出土して注目されましたが、分析の結果、人間ではなく、犬のものらしいとされています。県内ではこれまで宇土市の轟貝塚から出土した例があります。これほどまとまって出土した例は、全国的にもめずらしいものです。

糞石

## 魚　骨

縄文人は貝ばかりではなく、さまざまな海の恵みを受けていました。その中でも魚は大切な食料でした。出土品の中にも漁労に関する遺物が多いことからも裏付けることができます。

出土した魚骨から魚種が明らかになったものをあげると以下のようになります。

| | | | |
|---|---|---|---|
| マダイ | ボラ | コチ | サメ類 |
| クロダイ | マイワシ | カレイ | エイ類 |
| スズキ | ウナギ | | |

## 失われゆく遺跡“貝塚”

貝塚は古墳と並んで考古学上の代表的な遺跡の一つです。熊本県内には大小合わせて約130ケ所の貝塚が知られていますが、その多くが各種の開発により失われてきました。それは貝塚の多くが海辺や川沿いなどに作られ、現在の集落と重なっていたり近接し、しかも古墳などと違って地下深くに埋もれている場合が多いことなどが主な原因です。今私達が訪ねることができる貝塚は、ほんの一握りにしかすぎません。

こうした状況ですから、貝塚を発掘する機会は益々少なくなるに違いありません。いや、もしかすると、二度と巡り合うことはないかもしれません。今、貝塚は危機に瀕しています。むしろその実態は壊滅的と言っても言い過ぎではありません。それだけに、残された貝塚を未来への遺産として守ってゆかなければなりません。

# 編集後記

黒橋貝塚は平成３年５月に発掘調査を終えましたが、出土遺物の整理など室内作業は現在も続けられています。したがって、今回の企画は調査の成果を速報という形での出土遺物を中心とした展示になりました。特に獣骨や魚骨などの自然遺物について、量、種類とも増加しています。限られた紙面で、これらを全て掲載することは困難です。詳細な報告については、別の機会に託さなければなりません。

第２回企画展
縄文人の暮らしと風景
―黒橋貝塚発掘展―
平成４年９月30日
発行／熊本県立装飾古墳館
〒861-05 熊本県鹿本郡鹿央町大字岩原3085番地
Tel 0968-36-2151（代表）
印刷／下田印刷熊本支店
〒860 熊本県熊本市南熊本３丁目1-3

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第 2 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：縄文人の暮らしと風景 黒橋貝塚発掘展
発行：熊本県立装飾古墳館
〒861-0561　熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地
電話：0968-36-2151
URL：http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日